国立大学法人
京都教育大学
KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

体育・スポーツ指導力養成プログラム通信

第6号　2019年度インターンシップⅠ・Ⅱ，退職教員からのメッセージ，資格認定の報告
2020 年5月8日発行

はじめに

体育・スポーツ指導力養成プログラムでは，2019 年度も 1 年間を通じて陸上，体操，サッカー，バスケットボールの小学生スポーツ教室で指導実習（インターンシップ）を行いました．2019 年度にインターンシップに参加した学生は 24 名（Ⅰ;11 名，II:13 名）でした（図 1）．各学生が毎回のインターンシップで提出している振り返りのレポートを時系列で見ていくと，子どもたちに対して何もできない所からスタートしたところから，個に応じた関わり方ができるようになり，叱ることができるようになり，一人で集団をまとめることができるようになるなど，プログラム名となる『スポーツ指導力』はもちろんのこと，教員として活きるであろう様々な力が身についていることが読み取れます．

今号では，2019 年度のインターンシップでの学生の学びの一端を紹介します．加えて，事業の立ち上げから，各教室での学生の指導に尽力して頂き，退職を迎える客員教授の先生方からのメッセージ，資格認定者の報告を行います．

1.　インターンシップⅠ・Ⅱでの学び

今年度のインターンシップに参加した 24 名は表１のように各教室に分かれ指導実習を積み重ねました．陸上教室の参加は少なかったですが，インターンシップの免除対象（各教室でのスタッフを継続的に 2 年以上実施）となる学生は多く在籍し，担当教員の指導のもと子どもたちへの運動指導を行ってきました．　以下では，インターンシップⅠ・II を行った学生の学びを実習レポートとともに紹介していきます．

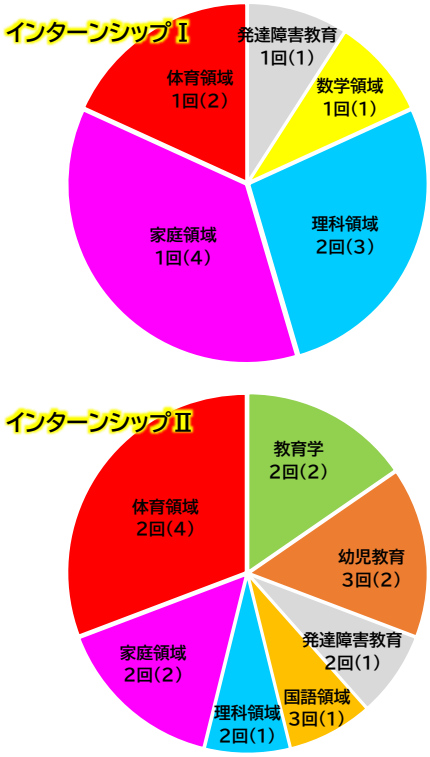

図１　2019 年度インターンシップ参加学生の内訳（括弧）内は人数

表１　2019 年度インターンシップ受講生，免除対象の内訳

	担当教員	Ⅰ	Ⅱ*	免除対象
バスケ教室	北川順一	5	3	2
サッカー教室	福田博	4	4	5
体操教室	海原洋	1	6	1
陸上教室	福田晴也	1	2	5

*インターンシップⅡでは2名が2教室にまたがって参加したため，総人数が図1と異なっている．

理科領域専攻２回　藤嶋さん（インターンシップⅠ修了）

スポーツクラブ指導入門（陸上）⇒インターンシップⅠ（バスケットボール）

スポーツクラブ指導入門では陸上教室に参加をしました．陸上教室では子どもたちとあまり関わることができませでしたが，インターンシップⅠでのバスケット教室では子どもたちとたくさん関わることができました．（中略）　今回のインターンシップⅠを通して感じたことは，子どもたちの意欲関心を引き出す難しさと，中々練習に参加してくれない子への対応の難しさです．

自分は1・2年生を担当することが多かったです．（中略）低学年の子どもにバスケの楽しさをわかってほしいのに対して，まだ基礎面ができていないため，シュートを入れる楽しさや，ドリブルで相手を抜く楽しさ，パスを続けていって仲間とゴールを目指す楽しさなど，バスケのメインの楽しさをあまり感じてもらえないという矛盾から始まりました．ボールをその場でつく，ある位置からシュートをするなど単調であまり面白くない練習が多くなってしまい，途中で集中がきれてあまり練習をしてくれない，指示を聞いてくれない子どもがいることになってしまいました．しかし，単調な練習をするのではなく，工夫して練習を行うと子どもたちはすごく食いついて練習を行ってくれました．（中略）

今回のインターンシップⅠでは多くのことを経験し，学ぶことができました．また，小学校教員になりたいという気持ちがとても高まり，自分の適性についても分析し，これからの課題を見つけることができました．インターンシップⅡも続いて行い，自分をもっと分析していきたいと感じました．

バスケ教室での活動の様子
（インターンシップⅠ）

家庭領域専攻１回　矢島さん(インターンシップⅠ修了)

スポーツクラブ指導入門(サッカー)⇒インターンシップⅠ(サッカー)

インターンシップⅠを終えてサッカー教室へは 7 回参加したことになります. スポクラの 3 回の実習を終えて, インターンでどのクラブに参加するか迷い. はじめのうちは同じサッカー教室ではなく, 他の種目に行った方が良いのだろうかと心配でした. ですが, 今は, 長く参加したことで得られた発見が多く, サッカー教室を選んで非常に良かったと感じています. (中略)

最初は,「将来, 部活動をもちたいから役に立ちそう」という軽い気持ちでスポクラの授業を受講したのですが, 講義を終え, 参加実習の回を重ねるごとに, 様々な発見があり, 少しでも自分の力になっていることを感じて嬉しくなりました. その反面, これまで考えていなかった課題も多く出てきて, 自分がスポーツを指導する立場になれるのかという不安も増えました. ですが, 参加していなければ指導する難しさにも気づくことができませんでした. これから, 大学を卒業して無事に教員採用試験に合格できたとしても, 現場で実際に子どもたちの指導にあたるまでは, 最低でも 3 年の時間があります. その間に講義やボランティアへの参加など, 自分でできることを探して行動に移していきたいと思います. (中略)ここで学んだ知識と味わった楽しさ, スポーツ指導者になりたいという今の熱意を持ち続け, 大学生活残り 3 年間で学びと経験を増やしていきたいです.

サッカー教室での活動の様子(インターンシップⅠ・Ⅱ)

教育学専攻２回　山本さん(インターンシップⅡ修了)

スポーツクラブ指導入門(バスケットボール)⇒インターンシップⅠ(サッカー)⇒Ⅱ(体操)

計 7 回のインターンシップⅡを通じて, 全ての学年を担当させていただいたこともあり, 児童とのコミュニケーションをとる力がついたと思います. 初めは,「すごい！」といった簡単な声かけばかりでしたが, 回を重ねるごとに具体的に良いところを見つけて声かけするように心がけました. また,「なんでできるの？」という風に声かけすることで, 児童とコミュニケーションをとれるような工夫ができるようになりました(中略).

見つかった課題として, 第一に安全や危険に対する意識の低さです. 特に体操教室では児童の怪我も多く, また, それが時には大きな怪我になりかねないため, 様々な可能性や危険を予測し先に対応していくことが大切だと感じました. 自分の中で大丈夫であろうと思ってしまっている部分もあったため, そこは気づいた瞬間に練習を止めてでも安全管理に気を配る必要があったと思います. また, 安全管理にも通じることですが, 全体を見る力を身に付けて行きたいと思います. 反省会で自分は違う所を見ていて, 同じ空間にいたはずでも知らなかったことが多々ありました. 全てを見ることはできないですが, 自分が指導している児童に付きっきりにならずに, 全体を見て動く必要があると感じました.

毎回の体操教室に意欲的に取り組めたのは, 児童の頑張っている様子やできるようになった時の笑顔が何よりもうれしかったからです. 体操教室では児童により深く関わることができた分, 喜びも大きかったように思います. (中略)特に, こういった体操教室や学校の体育では, もちろん一定の技ができることも重要だが, 安全に配慮し, まずは体を動かし, 挑戦していく中で興味や楽しさを知ってもらうことが重要だと思います. これら全ては, スポーツの指導において言えることであり,『このような体育の授業がしたい』という具体的なビジョンが持てました. 私自身, 副免で体育を志望していることもあり, 実習などでぜひこれらの経験を生かした指導をしていきたいと思います.

体操教室での
活動の様子
(インターンシップⅡ)

体育領域専攻２回　島根さん(インターンシップⅡ修了)

スポーツクラブ指導入門(陸上)⇒インターンシップⅠ(体操)⇒Ⅱ(バスケットボール)

インターンシップⅡでは１クール(７回)全ての時間を毎週児童と過ごすことができたため，とても勉強になりました．児童と仲良くなることはもちろん大切だが，教室として教えるところはしっかり教えなければならない．児童にとって，ただの優しいお姉さんになってしまうのではなく，しっかり先生になるためにはどうすれば良いのかをよく考えました．子どもとの距離感が近すぎてお喋りをするだけで教室を終わらしてしまってはいけない．だが，子どもと全く話さないのでは自分がいる意味がないという微妙な距離感の取り方が少し分かったように思います．積極的にこちらに話しかけてくる児童とだけ会話するのではなく，あまり教室にも参加したがらない児童に参加を呼び掛けてみたり，シュートが入らないと悩んでいる子と一緒に練習してみたりと，これまで出来なかったことに挑戦できました．児童と接する面では同じであっても，インターンシップⅠに比べると，より先生らしい行動ができたように思います．

また，児童を叱ることができるようになりました．何に対しても理由を聞かずに怒るのはもちろん良くないが，危険な行為をした時や他の児童に被害が及ぶような行動をしている場合は叱る必要があります．これまでは怒ってしまうと子どもに嫌われてしまうかもしれないという気持ちがあり，そもそも怒り方が分からずに見て見ぬふりをしてしまうことが多かったです．だが今回の教室ではハンドボールのゴールで遊んだり，友達にボールをぶつけたりする行為に対して正しい対応をすることができました．何度かそういった場面での経験を通して，正しい場面で正しい叱り方をしているのであれば，児童の信頼は失われないことに気がつきました．(中略)ただ，子ども同士の喧嘩を止めるのはとても難しかったです．児童１人１人の意見をしっかり聞いてあげなければならないし，どちらか片方だけを謝らせて済む問題でもありません．(中略)児童はとても真剣に自分の意見を主張しているのであり，それを教員側が適当にあしらうのはあってはならないことであると感じました．インターンシップの場は，スポーツを教えることがメインなのでいつまでも喧嘩の対応に追われるのもあまり良くないのかもしれないが，今考えると，きっちりと１人１人の話しを聞いてあげることができて良かったのだと思います．

バスケ教室での
活動の様子
(インターンシップⅡ)

2.　退職教員からのメッセージ

本プログラムの立ち上げ当初から 2019 年までの 10 年以上に渡り，多くの学生の指導に携わって頂いた海原洋客員教授(体操教室担当)，福田博客員教授(サッカー教室担当)がこの度退職を迎えました．ここでは，各先生から学生たちへのメッセージをお伝えします．

海原　洋先生

平成22年3月京都市立小学校の定年退職と同時に，現プログラムの前身である「学校運動部活動指導者育成事業」の2年目から10年間，客員教授として関わらせていただいた．この育成プログラムの中核は，京都教育大学独自の「スポーツ指導者資格」認定システムである．その指導者に求められる「能力像・評価システムの在り方」についての検討会議では，毎回充実した時間が得られた．

私が「スポーツクラブ指導入門・インターンシップ」等の指導において，軸として掲げてきた信念は，教育現場時代からずっと変わることなく『一人ひとりの子どもを大切にすること・その具現化に向けて』についてである．学生の皆さんとの学びの都度，そのことを説くことに終始努めてきたつもりであるが，如何だったであろうか．

私自身には，その信念とするものが現在も自らを突き動かしていると実感する場がある．それは，この30余年間，年3回ある小学校同窓会に呼ばれる時である．これほど教師冥利に尽きることはないと心底思う．それは，子どもたちの人生に寄り添い，共に育ち合った教師時代の数々の経験が，今も自分自身の原動力だと確信できるからである．教師になってよかったと思うと同時に，自身まだまだ進化していかねばと胸が熱くなる．

この10年間，京都教育大学に少しでも恩返しできただろうか．教師は，常に情熱をもって進化し続けようとすることの大切さを伝えられただろうか．学生の皆さんの将来に向け，役立つことができただろうか．

最後に，学生の皆さんとの素晴らしい出会い，時間，感動に心より感謝している．

福田博先生『頑張らなくていい』

重たーい話で申し訳ありません.

私はどこへ出しても恥ずかしくないガン患者である. すでに10年以上経過. 理論上は治癒と自分に言い聞かせながらも,「転再(転移再発の意)は忘れたころにやってくる」. 年一回の定期検査はやはり正直「怖い」.

校長3年目の正月明け, 胃がんがみつかり, 進行性につき即刻入院となった. 検査, 検査の毎日ののち, 家族が呼ばれ今後の治療などの説明がなされた.「基礎体力は十分にあるので手術はできる. 浸潤が心配されるので胃と脾臓の全摘手術を行う. あなたの場合, 予後が期待できないので向こう5年の生存率は5人に一人！20%無いと思っていて欲しい」. ついては,「すぐに手術に入るか？抗がん剤治療を施し病巣を小さくしてから手術に入るか？」,「外泊許可を出しますのでゆっくり考えてください！」. ガーン‥とどん底に突き落とされ, 治療法を選択せよ！と言う. 何の決め手になるモノも持ち合わせていないが「後者」を選んだ. とことん追い込まれたが, いかに自分が強運の持ち主であるかがこのあたりからわかってくる.

一つ目は, 消化器外科の医師団に教え子がいたこと. 部屋に寄ってくれて,「先生, ああやって厳しいことを言うんです. 大丈夫！と言えないんです」. 二つ目は, 手術室に入りステンレス板の上で仰向けになりながら不安の極み, 麻酔科医が説明し始めたとき, 頭の方から何と「校長先生！〇〇です. 大丈夫ですよ！」天使の声. 看護師さんが保護者だった. カウント3・2・1, おそらく笑顔で全身麻酔に入っていったのは私だけでしょう.

人間横になっている時間が長いとあっという間に筋肉が落ちる. 加えて抗がん剤点滴治療. 胃がない分, 医者いわく「食べたものの半分は素通り」. ビフォー・アフター, 体重は20㎏以上やせた. わかりやすく言えば, 体重のほぼ3分の1をなくしたことになる. でも生きている.

入院中, たくさんの方々が見舞いに来てくれた. 誰もが心からの励ましの声「頑張れ！」を帰り際にかけてくれる. 本当に感謝している. そんなとき, PTA役員で日赤の看護師さんをしている保護者が来てくれた. ここでお見舞いのマニュアルを教わった.「先生, 見舞いの時間は5分以内」長いと患者は無意識でいいところを見せようと力が入り, 後で疲れる. そして, 様子がわからず安易に「頑張れ」は言わない方がいい. どうもがいても頑張るすべがない人もいるからと. この方は2～3分経ち「今度は校長室で…」と言って出て行かれた.

以後, 私は人を励ます時「頑張らなくていい. 負けるな」を使うようにしている.

---

3. スポーツ指導者資格認定状況

表２は 2019 年度末(卒業時)および 2020 年度当初(4 回生への進級時)に資格認定を行った学生数で, 計 45 名に対して基礎または上級の資格を認定しました.

2020 年度のプログラムは新型コロナウイルスの影響により, 例年とは異なる形での進行となる予定ですが, プログラムは進めていきます. 対面授業再開後に体育・スポーツ指導者養成プログラム兼スポーツクラブ指導入門の説明会を実施します. 日程は決定次第に連絡しますので, この通信を手にしてプログラムに興味を持った学生のみなさん, プログラムの経験は学生生活そして教員生活に確実にプラスになるので, 是非参加して下さい.

また, 説明会に参加できない学生は, 本プログラム担当事務(教職キャリア高度化センター1F, スポーツ指導者養成オフィス)または, 体育学科の小山(koyama@kyokyo-u.ac.jp)まで連絡をして下さい. 説明会で配布する資料を用いて個別に対応します.

表2　2019年度卒業生および2020年度当初(新4回生)におけるスポーツ指導者資格(基礎・上級)認定者の内訳

基礎		上級	
幼児教育	1(1)	教育学	4(1)
国語領域	1(1)	幼児教育	1(1)
英語領域	1(1)	発達障害教育	3(0)
理科領域	2(0)	数学領域	1(0)
技術領域	1(0)	美術領域	1(0)
音楽領域	2(0)	体育領域	12(0)
体育領域	15(11)		
計	23(14)	計	22(2)

注)数字は人数, ( )内は2020年度当初に認定された人数

← 本プログラムに関する情報が掲載されています. ぜひ, 見て下さい

教職キャリア高度化センター　スポーツ指導者養成部門
体育スポーツ指導力養成プログラム
(担当)小山 宏之